

研究所ニュース No.9 2005年1月28日発行

特定非営利活動法人 非営利・協同総合研究所いのちとくらし

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-29-3 日本パーティビル4F

TEL 03-5770-5045, FAX 03-5770-5046,

HP:www.inhcc.org Email:inoci@inhcc.org



書評 モブ・ノリオ著「介護入門」

八田英之

☆☆ 看護師でケアマネージャーである妻との対話 ☆☆

「ご感想はいかがですか？」

「うーん。芥川賞なんて読んだのは何年ぶりかしらね、『純文学』っていうのかしら。こういう文体は、ちょっと苦手だな。でも途中から引き込まれたけどね」

・・・第131回芥川賞（すでに132回も発表されているが）の受賞作である。著者そのものであるような、祖母の介護に当たる29才、金髪の「俺」が、「朋輩(ニガ-)」に語りかけるスタイルのモノローグで全編が綴られる。時は介護保険施行まもなくの2000年春。

「この人麻葉中毒なの？目の隅に黄色の霏があらわれたり、話があっち、こっちに飛んだり」

「小説だからねえー。同じ事が散漫に、あちこちに出てくるようなんだけど、そのつど少しずつ詳しいことがわかってくる。読者の？を作り出して、答えていくという手法なのかな」

・・・奈良県のムラの旧家であった祖父＝「漆の汁をコップで飲まされ」あらゆる毒草、毒虫への耐性を備えた土人、元ミス奈良の祖母、事業を興して軌道に乗り始めた頃に死んだ父、父の死後会社を切り盛りしながら祖母の介護に当たる母、その会社の営業で働いていたがやめてニューヨークに行っていたとき、祖母の事故を知ってとって返し、介護に専念している自称プライベートミュージシャンである俺、やはり同じ会社で働いている叔父、叔母。こうした家族関係が、様々な「言葉」の連想から語られていく。たとえば、大麻の関連で「ホームセンターの殺菌済みの土」に覚える「違和感」から、祖父の話というように。

・・・大正5年生まれ祖母は、痴呆症状がでていたが、ある日自宅の玄関で転び、頭蓋骨陥没、三度の大手術を受け、以後半身不随、言葉は不自由になる。半年後退院、自宅介護の道を選ぶ。

「夜中に三回も起きてオムツを変えるというのは大変だねえ」

「ウーン、それはその方が気持ちはいいでしょうけどね。12時頃に変えたら、5時くらいいま

INHCC, Institute of Nonprofit Health Care Cooperation

では大丈夫、という人もいるけどね。おじいちゃんは手が動いたからオムツが濡れるとはずしたりして大変だったけどね。(妻は脳脊髄液と髄核の逆流、在宅5年で死)

「おばあちゃんの介護の描写は迫力があるね」

「本物っていう感じね」

『人間こないになったらおわりやなあ。私やったら死んだ方がましやわ』というおばさんの言葉への強い反発。被介護者の悲慘に対する安易な同情の言葉に、「ヨウ、ケツ吹いて飯食わして毎晩気持ちよさしたってから言えや」って、これはすごいね」

「実際、普段のことをまるで知らない遠くの兄妹なんかがたまに利用者さんの所に来てあれこれというのがよくトラブルになるのよね。それがまた正しいときにはなお困っちゃう」

「四カ所の『介護入門』でいってることも、それだけ取り上げると浮いちゃうけど前後のつながりで読むと説得的だよ」

「結局の所、家族介護ってベストなのかな、どうなんだろう」

・・・介護用ロボットを作るのなら「自慢の内孫のような介護ロボットを作れ」、誠意ある介護の妨げとなる肉親には、いかなる行為も期待すべからず。続柄意識の義務感には被介護者を不快にさせる。責任感が高く、義務感は卑しい」「派遣介護士の質は人間の質である」「数人のプロ意識を有する介護士だけが、俺が毎日祖母の隣で眠ることを驚きを持って讚え・・・同じ汗を知るもの同士の頼もしさで優秀な同僚と労働を分け合うときの心強さ」「血の優位ではなく記憶の優位。祖母に育てられた膨大な記憶」「無言で介護すべからず」。これらの“美しい”言葉は、「俺」の、祖母との介護という関わりの中での、苦悩と覚悟、喜びが紡ぎ出したものである。「あんたお昼まで寝てんのんか」という世の中の目、いつまで続くかわからない「永遠の」介護、おのれが社会的に何者でもないという自覚、だが、「何者かになることがすべてであるかのような思考を俺は拒絶する」。祖母の介護にすべてのエネルギーを費やしているいま、ここがおれが「転生をとげた場所」であり、「俺の命は下の世話のためにある」「ここで生きられなければ、俺はどこでも生きられない」。祖母は泣く、しかし、「のけぞって笑う」こともあるのだ。この笑いは「俺と母だけの手で死に物狂いでかちとった」ものなのだ。

「すごいおばあちゃん子だったんだね」

「だからおばあちゃんとの気持ちの通い合いを求める」

・・・「おばあちゃん、ちゃんと食べるもん目で見て食べようや。・・・死んでいた祖母の目の奥から一筋の光が」あらわれる。

「読後感はいいいね」

「我々の言葉で言えば、生きてることそのものの価値とか、被介護者はかわいそうな人ではなくて権利の主体であることとか、体験から生み出された文学的な“言葉”で語られている」

「最後の“**I WANNA RISE**”には、自分だけじゃなくて、おばあちゃん、たってよ、という意味もあるのかしらね」

「すごい、わかったんだ」

「ふん、辞書引いたのよ」

(はった ふさゆき)

・文藝春秋、2004年8月

理事長のページ

角瀬保雄

非営利・協同と民主経営とが時に対立的な概念として理解されることがありますが、私はそのようにはとらえていません。両者の関係について詳しくは別の機会に論じたいと思っていますが、ここでは試みにヤフーの検索にかけてみた結果をご紹介しますと思います。非営利・協同のヒット数は**2004年12月24日**の時点で、**3万3437件**となっていますが、一方、民主経営は**128件**でその**300分の1**でしかありません。ここに両概念の今日の社会における客観的な位置づけが示されているように思います。いまや「非営利・協同は時代の言葉」、「**21世紀は非営利・協同の時代**」といわれるまでになっています。非営利・協同は文科省の科学研究費補助金の分類リストにも載るようになりました。わが研究所が掲げている非営利・協同という旗印が社会的にも広く受け入れられている証拠といえるでしょう。

ところで昔から秋は学会シーズンといわれてきましたが、専門的なものから学際的なものまで、大衆的な規模のものから小さな研究会にいたるまで、大小さまざまな研究集会が全国で催されます。ここでは**2004年秋**に開催された二つの集会を紹介したいと思います。一つは「協同集会」です。**2年毎**に全国各地で

持ち回りの形で開かれているのですが、今年は**10月30日から31日**にかけ、「いま『協同』を拓く**2004全国集会 in 長野**～人らしく生き、くらし、働くために～」という名で、長野市で開催されました。開催地の非営利・協同団体が中心となって実行委員会を組織していますが、その中心になっているのはわが研究所とも交流関係にある協同総合研究所で、日本労働者協同組合連合会の全面的なバックアップをえています。今回の大きな特徴は、松島松翠・JA長野県厚生連佐久総合病院名誉院長が実行委員長になり、長野民医連や長野医療生協なども事務局団体、実行委員会構成団体に加わり、保健・医療・福祉の事業・運動団体が大きな役割を果たしたことです。また連合や全労連など労働団体の協賛も注目されるどころです。わが研究所も協賛団体に名を連ね、長野県の住民でもある主任研究員・理事の石塚秀雄、事務局メンバーの竹野幸子とともに私も参加をしてきたところでした。

一日目の全体集会の目玉は田中康夫（長野県知事）と堀内光子（ILO駐日代表）両氏の記念対談でしたが、田中節の一人舞台の感がありました。また寺島実郎（財日本総合研究所理事長）による「世界潮流と日本の針路」という基調講演があり、アジアの国々との協力の重要性が強調されました。話の内容それ自体は興味深いものでしたが、残念ながら氏は非営利・協同については、ほとんど正確な理解をもっているとはみえませんでした。二日目は分科会で**12**の分科会と**2**つの移動分科会がありました。私は**第1**分科会「長野の実践から考える『地域医

療・保健・福祉の連携』に参加しました。長野医療生協と佐久総合病院国保川上村診療所、小川村社会福祉協議会の実践報告がありましたが、中越地震の直後で、医療生協の救援活動が報告され、大変盛り上がりました。その後 **11月3日** に開かれたわが研究所の公開研究会で講師をされた色平哲郎医師も、偶然、佐久総合病院の南相木村国保診療所長で、その内容には協同集会の分科会と共通したものがありません。いずれこれらは活字となって紹介されることでしょうか、ここではこの程度にとどめておきます。

次は日本科学者会議の第 **15** 回総合学術研究集会です。これも **2** 年毎に持ち回りの形で、全国各地で開かれるもので、今回は **11月26日** から **28日** にかけて京都のキャンパスプラザと立命館大学で開かれました。その趣旨は「持続可能な文明をめざして一阻害要因の解明と克服の展望—平和、環境、経済、科学技術、教育・文化のあり方を問う—」というもので、私は東京（中央大学、**1984** 年）、那覇（琉球大学、**1996** 年）に続いて **3** 回目の参加でした。**13** の分科会と分散会、特別セッション、自由論題セッション、ポスターセッションが用意された、盛り沢山な内容の集会でしたが、全体としては環境問題に重点が置かれていたように思われました。医療関係では「医療・薬と生命倫理—人間の尊厳をもとめて—」（片平洸彦ほか）という重要な今日的な課題についての分科会がもたれていましたが、私は「持続可能な社会経済システムを問う」という経済の分科会に参加しました。これは二つの会場に分かれてもたれ、それぞれ報告者が異なるというもので、残念ながら片方の話

しか聞けないということになります。

私はその一つ、「経済民主主義と新福祉国家のかたち」（二宮厚美）、「持続可能経済と市場メカニズム」（中谷武）、「社会経済システムにおける非営利・協同セクターの位置と役割」（川口清史）、「労働組合と経済民主主義」（横山寿一）、「**CSR** 時代の株主運動と企業改革の課題」（森岡孝二）という、私の研究テーマと直接かかわる報告が集められた会場の方に参加しました。私なりに注目したのは川口清史氏による報告で、非営利・協同セクターの問題が日本科学者会議の総合学術研究集会で取上げられたのは、おそらくこれが初めてではないかと思えます。開催地の関係でここでの報告者は関西地方の人々ばかりとなりましたが、私ははるばる東京からの出席ということで、すべての報告者に対する質疑、討論に積極的に参加し、共通認識の形成に貢献できたのではないかと思います。

なお集会後には、折からの嵯峨野の秋をたっぷりと鑑賞・カメラに収めることができました。機会をえてその成果を公開できたらと思っています。

今回は学会・集会の状況報告といったものになりましたが、最近の機関誌の記事では北九州の健和会特集が読まれているようです。またワーキンググループの研究会が関西地方でもたれるなど、ようやく研究所の活動も地方へと展開を見せるようになってきました。新しい **2005** 年度も研究所の研究活動を盛り上げていきたいと思っていますので、機関誌やニュースへの投稿、ブックレットの執筆など会員諸兄姉の積極的な参加を期待しております。

(かくらい やすお)

「いま「協同」を拓く 2004 全国
集会 in ながの」
① 第5分科会報告
事務局 竹野幸子

10月30・31日に開催された集会へ参加した。協賛広告を出したり、機関誌『いのちとくらし』やブックレットの委託販売を依頼したりして当日長野市へ向かった。初日、全体集会の休み時間に委託販売会場の様子をうかがったら、『いのちとくらし』は表紙を見ただけでは内容が把握しづらいことを実感した。特に重ねて展示してしまうと、特集が重なってしまって見えない。立ち寄った参加者も、色とりどりの重なった表紙の中で一番上にある特集に興味を持った場合、手にとってみることになる。これはよくないだろう、ということで、現在の表紙デザイン変更の検討へとつながっている。

第2日目、私は第5分科会「子育て・教育をみんなの手で」に参加した。コーディネーター馬島直樹(長野県子どもを守る会)氏による問題提起は、子育て・教育のなかからかつての「協同」が失われ、過度の競争原理に子どもたちがさらされ、少子化社会においては「子ども期・青年期」の喪失が大人社会への能力主義・国家主義・受益者負担などにつながっているという点であった。

コメンテーターは池本美香氏(株式会社日本総合研究所)であり、現代の子どもの親世代がすでに協同よりも受験などの競争、孤立の体験を多く持つこと、

選択肢が提示された中で行動を選択することができても、選択肢にないものを創ることができないこと、子育て・教育にこうした親が参加することによって、親が協同の方法を改めて学ぶ機会が必要ではないかという問題提起があった。

こうした問題提起に対して、「教員の協同ができず、子どものいじめや問題行動が自分のクラスで発生すると指導力を問われてしまい、切羽詰った状況におかれているという相談が教員から寄せられる」「子ども、親、教員などから相談室に寄せられる相談を受け止め、正面から向かい合うことが必要」(原山氏・教育相談室)、上田地区の不登校への取り組みから「行政と民間が協同を始めているが、学校がこうした動きに批判的なところもある」(依田氏・子どもサポートプラン)、「自然体験学習の幼児教室から子育て支援センターの業務委託を行い、公立学校の矛盾を踏まえ、幼稚園および小中一貫の私立学校づくりへと取り組んでいる」(内田氏・ながのこどもの城いきいきプロジェクト)といった報告がなされた。いずれも競争原理だけではない教育のあり方を模索する試みではあるが、公立学校の内部の問題が指摘された内容であった。こうした中で、東京の学童クラブの活動報告(設楽氏・労協センター事業団)、コープながの子育て支援活動報告(若林氏・コープながの)は、学校教育以外の子育ての場をゆたかにしようという取り組みであると言える。取り組むに当たり、子育てに参加する世代間の認識のずれ(親、祖父母)を矯正する必要性が指摘されていた。教育・子育て「協同」の取り組みは、特に親は自分の子どもが成長する期間での参加となる場合が多く、継続したスタッ

フの確保や運営方法が問われる点である。県立高校の教員である宮下氏（辰野高校）からは、生徒・父母・教職員による三者協議会の設立と学校づくりの取り組み、さらに地域への連携と広がった報告があったが、公立小中学校と公立高校の裁量差を感じさせた。

質疑応答も含め、さまざまな視点の提議があったが、コメンテーター池本氏の「親の中に協同の価値の認識ができておらず、質の維持、ライフスタイルの多様化に対応できる動きとはなっていないため、むしろ協同を進めるには商業ベースが安心という選択をしかねない」という指摘があまり議論の対象とならなかったのが残念であった。これは都市に住む若い親世代の一部の認識であるかもしれないが、その世代が協同・参画を進めるうえで大切な視点であり、協同は自明のものとして議論を進めようとすることへの警鐘となる指摘ではないだろうか。

機関誌 9 号が教育特集であり、教育現場に携わったことがあったため、この分科会を選択して参加したが、池本氏の「自分で子育てをしたいという女性を、保育所の整備などによって逆に子育てから遠ざけているのではないか」という日本の子育て支援への指摘（『失われる子育ての時間—少子化社会脱出への道』）は興味深い。



「いま「協同」を拓く 2004 全国
集会 in ながの」② 異種
協同は拓かれるか 石塚秀雄

二日間でのべ 2100 人を集めたので、成功といえる集会である。第一回は 1987 年に開催されすでに 15 年以上も続けて開催していることも立派なことである。当初から「協同を拓く」というスローガンが掲げられていたと記憶する。この 15 年の間に日本の非営利・協同セクターの運動は確実に広がり拓かれつつあるとも言える。12 の分科会がもたれていることも、分野ごとの課題と取り組みが鮮明化していることの現れだと思われる。

今回の長野集会では対外的なアピール力があつたと思うが、マスコミの取材が見られなかったのが、これだけのイベントなのに残念であった。一般に訴えるためのなにか工夫が必要であろう。

記念対談における田中知事のいう「コモンズ」と ILO 堀内さんのいう「ディセントワーク」の突き合わせは、多少同床異夢話のところもあった。田中氏の言う「コモンズ」は基本的に地域共同体的ことであり、非営利・協同セクターとは

異なるものである。その両者の接合という議論を田中知事と深められればよかった。またディセントワークについては、県職員の公務労働をサービス業と考える知事としては、理解できない点もある。しかし、こうした異種対談というのも面白い。

基調講演の寺島実郎氏の「世界潮流と日本の進路」は中国経済の発展と日本の経済というマクロ的な話で、協同セクターとは直接関係はない話であったが、中国の経済発展により富裕層が誕生しつつあるが、仮に人口の**3**パーセントがリッチ層だとすると、その数**5000**万人で、日本のリッチ層よりはるかに多い市場ということになる。また香港が世界第一の港だそうである。神戸はすでに世界の港ではなくなっている。日本社会は自己中心的個人主義社会になりつつあり、アメリカの【良質の】個人主義とは似て異なるものであるという。日本はアメリカから**NPO**やボランティアネットワークを抜いたような、弱肉強食の社会になりつつあるという話も深刻である。

非営利・協同セクターもとかく、身近な問題しか見ないという点では、寺島氏の話のように、グローバルな視点を踏まえて思考すべきだという点、アジア的共同を促進すべきだという結論など、大いにためになった講演であった。

さて、私は「協同組合と労働組合を考えるという」分科会に参加した。農協は合併や企業化指向を強めているので、職員は農協の従来目標である農業と農業製品の安心安全供給と経営方針との板挟みに苦悩しているようであった。しかし、佐渡農協の取り組みは、地域農産品を「サド規格」や「地産地消」といった地域特産品化などを通じて地域活性

化につなげている報告もあった。生協においてはパート労働の増加、外注委託などの増加によって、職員の団結がばらばらになりつつある傾向があることが述べられた。労金からは**NPO** 振興のための融資の試みを小規模ながら実施しているとの報告があった。今後の地域でのいわゆるコミュニティ・ビジネスなどの財政的な貢献を明確に位置づけることが望まれるが、市民事業、ボランティアという概念と協同セクターとの関連づけが一層追求されるべきと思われた。

福岡の自交総連の書記長の話では、構造不況業種といわれるタクシー業界の労働組合が事業型のいわば労働者協同組合になっていく苦闘のプロセスが語られた。労働者性を維持しつつ自主的な報酬制度の工夫を図り、地域において介護タクシーの試みも行っている。

長野佐久病院の労働組合の歴史は、労働組合が地域医療を重視したこと、経営参加を行い、労使の単純対決を避け「労使協同」を行った点に特色があるとの報告があった。

コメンテーターの南信州地域問題研究所、鈴木文熹氏からは、近年、労使関係も協同のあり方も変化しており、従来型の対応では困難になっている。地域に出ること、地域から学ぶことが大事になっているとのコメントがあった。また、島村博(協同総合研究所)からは、労働者協同組合の法制化に関連して、協同組合や企業組合、非営利組織における労働の中身の違いについての議論を深めるべきとのコメントがあった。法制化については、「協同労働」という概念でくくるのは、実際的には難しいであろう。こうした表現で法律があるのは、厳密に言うとはスペインだけである。一般的には、企

INHCC, Institute of Nonprofit Health Care Cooperation

業の社会的責任といった区分のほうが支持を得られなく、「社会的企業法」あるいは「非営利企業法」といったほうが、より多くの企業形態を含むことができるだろう。全体として、報告者の中に、自治体労働者、一般労働組合、生協関係者が増えても良いという印象を受けたが、もちろん自戒的感想である。

<p>事務局経過報告 (2004年10月～12月)</p>	
<p>【10月】 (行事) ・18日 鶴岡調査打ち合わせ ・20日 HP テンプレート打ち合わせ ・23日 第2回研究会企画委員会 ・30-31日 「いま協同を拓く全国集会 in ながの」参加</p>	<p>(事務処理) ・2004年度中間決算・HP テンプレート作成開始 ・研究所ニュース No.8 発行 ・機関誌 9号発行準備</p>
<p>【11月】 (行事) ・3日 第4回公開研究会 ・5日 機関誌9号座談会 ・5日 升田先生インタビュー ・6日 第4回理事会</p>	<p>(事務処理) ・機関誌9号編集 ・資料整理 ・HP テンプレート作成</p>
<p>【12月】 (行事) ・3日 地域協働ワーキンググループ ・3日 くらしと協同の研究所訪問 ・10日 生協総研公開研究会参加 ・11日 明大社会的企業国際シンポ ・17日 社会制度ワーキンググループ</p>	<p>(事務処理) ・ワーキンググループ 連絡 ・HP リニューアル作業 ・資料収集 ・ワーキンググループ 調整</p>

2005年1月25日現在の会員状況

団体(正会員 65、賛助会員 4)、
個人(正会員 163、賛助会員 36)

事務局からの連絡

(1) 第5回公開研究会のお知らせ

「患者と医療者の医療観 その齟齬の克服のために」

講師： 尾崎恭一（埼玉学園大学）

日時： 2005年2月28日（月）

午後6時から8時（予定）

場所： 平和と労働センター全労連会館
3階 304.305室（東京・御茶ノ水）

参加費：資料代 500円（当日、会場にて）

講師から：

「病気観、治癒目標（健康）観と治療手段（治療法）観、治るために望ましい患者・医療者関係の見方に関する、患者と医療者の考え方の違いについて、改めて考える機会になればと思っております。とくに、患者・医療者関係の見方に焦点を当てたいと存じます。」

お申し込みは：

研究所事務局へご連絡ください。

(2) 会員の2004年度新刊案内

研究所の会員で、新刊や論文を出された方の情報です。今後も研究所ニュース等でご紹介いたしますので、ぜひ情報をお寄せください。

大嶋茂男 『持続可能な「社会的経済」への革新 生命地域づくりで経済的基盤をつくる』生活ジャーナル（生命地域）（2004/04）

岩瀬俊郎 『国民皆保険制度を考える』本の泉社（2004/10）

田中夏子『イタリア社会的経済の地域展開』日本経済評論社(2004/10)

『社会的企業(ソーシャルエンタープライズ) 雇用・福祉のEUサードセクター』カルロ ボルザガ(編集), ジャック ドゥフルニ(編集), Carlo Borzaga(原著), Jacques Defourny(原著), 内山哲朗(翻訳), 柳沢 敏勝(翻訳), 石塚秀雄(翻訳), 日本経済評論社(2004/07)

大高研道「協働による地域の自律」『地域農業もうひとつの未来 農政転換を足元から』中嶋 信(編集), 神田 健策(編集), 自治体研究社 ; 地域と自治体第28集(2004/11)

大高研道「北アイルランドにおける地域づくり」「協同」実践の新局面」「北アイルランド紛争と地域づくり実践」『地域づくり教育の新展開 北アイルランドからの発信 叢書地域をつくる学び(13)』鈴木 敏正(編集), 北樹出版、13巻(2004/12)

副理事長のページ

高柳新

病院や診療所が患者さんから、物やら商品券などをもらう習慣がある。こういう悪弊をなくしたいという思いや、医療における平等を実現するために、民医連では設立されて以降、いつも「おことわり」の原則を守ってきた。この原則を時には厳格に、ときには柔軟に貫いている。

20年以上前のことだが、僕の務めて

いた大田病院には、喧嘩腰で置いてしまった品物を自転車に乗って患者宅にまで返しに行く担当者がいた。

現在でも病院に行くと、エレベーター等のわきに、「当院では患者さまからの贈答品はいっさいお受けしないことになっております。院長」と書いてある。正しいことなのだが、なんだか味気ないような気がする。「当院では差額ベッド料をいっさい徴収いたしておりません。院長」これだったら、きっぱりとした感じがするのだが。

ともかく患者さんから物を貰わないというのは、民医連では一つの常識になっている。僕もその常識の中で暮らしてきた。しかし驚いたことに、昨年来、僕が働いている診療所では、患者さんからお歳暮などをいただいているが、全部ばらして、別の患者さんに診療帰りに「これ、けっこうおいしいよ」といった調子であげている。その上、わざわざ定期的に、障害者の作業所で作ったクッキーなどを多量に買い入れ、一人暮らしのお年寄りなどに持たせている。紀州の梅干などもある。

患者から物を貰ってはいけない！これは正しい。しかし、患者に物をあげてはいけないということは聞いたことがない。そういえば、もう30年も前のことだが、大田病院で自転車に乗り往診をしてまわっていた時分、僕も、よく石焼いもや豆腐を買ってはお年寄りの家に持っていき、とてもよろこばれたのを思い出す。

新しい診療所(古くて、きたなく、狭い診療所だが)で昔、原点に戻ったような思いで医療にあたっている。とにかく忙しい。

(たかやなぎ あらた、医師)

いま、地域から新しい社会運動が拡がりつつある。そのことを、京都で体験している。正確には、自ら実践中であり、何よりも楽しい。このそう快感は、久しぶりである。70年安保時代の学生運動と、80年代から90年代初期までの労働組合運動や協同組合運動においては、自分の頭で考え、かつ社会的にも意味あることを実践できていたし、達成感もあった。しかしその後、それらの運動につき失望や苦悩があった。しかし最近ようやく、90年代中頃からの永い閉塞感、暗闇の先に、灯りが少しだけ見えてきた。

それでは、なぜ永い間不愉快だったのか。その理由は、まだ漠然としている。しかし、いまの灯りが、これまでの暗闇を照らし始め、その原因が解明できるかもしれない。それは、多分に「自主管理型の労働組合、協同組合」を性急に求めたためであり、自分の頭でいまでも考えている理念と、現実の運動体との間に、不一致があったのかもしれない。自分勝手な言い分だが、どうも後者が根源的な原因ではないかと考えられる。なぜなら、イ 自分が考える非営利や協同組織の運動を、この京都で実験してみたところ、前述したような楽しさを実感できているからである。しかし、その実践の客観的評価は、まだまだ先のことであろう。しかも、事業体からの給与所得者ではなく、税理士として独立した立場から関与している。

その運動体は、「京都高齢者協同組合・くらしコープ」である。もちろん、このような名称でいいのかなど、これからの検討課題も多く、活用する法人格も「営利法人」と「非営利法人」の併用である。そして、地域密着型の自立的な運営を追求している。事業的にも、くらしの助け合いという観点から、介護保険事業だけでなく、仕事おこしの意味も含めて、生活支援事業をかなり重視している。また、京都の特長として、山紫水明の京都再生に貢献できる、事業・経営を目指している点が挙げられる。これらのことが注目され、12月26日付京都新聞にも紹介記事が掲載された。

なお、一昨年税理士事務所を開業した際に、まだまだ個人的規模ではあるが、生産協同組合の研究所を併設した。労働組合員型の協同組織（サービス分野も含む）のみならず、利用組合員との複合型にも力点を置いて、事業・経営の全般をサポートすることが設立趣旨である。さらに、国際的な新しい社会運動の研究（比較税法を含む）や、遅れている理論的分析などにも取り組みたい。

（おおやぎ ひであき）

刑務所の医療 = 民営化と公営のはざま =

(1) 日本

日本では、現在(2003 年度末統計)、刑務所などの行刑施設は、医療専門施設(医療刑務所:八王子、大阪、北九州、岡崎)、医療重点施設(刑務所:札幌、宮城、府中、名古屋、広島、福岡)、医療少年院がある。非収容者(患者)総数は、68,114人、医師226名、看護師252名、薬剤師・検査技師等89名が担当し、年間約23億4500万円の予算、患者一人あたり35,000円の費用がかかっている。これらの施設での医療は「矯正医療」と呼ばれる。一般病院との連携もあるが、移送中も拘禁確保が必要とされる。「患者」は拘禁中のために、健康保険法の適用が停止される。そのために高価な治療ができないという。保険適用の必要性の議論が行われているようであるが、保険料や治療費の自己負担など、拘禁されている状態での自己意思行使が不可能という問題点がある。また医療の外部委託化(民営化)も検討されている。現状では、医療スタッフたちに対する待遇が低いので、給与などの見直し、兼業許可、外部医療機関との連携の強化などを検討中のようなのである。また患者たちも、詐病、脅迫的言辭、好訴性患者などと一筋縄でいかない者が多いという困難性もある。

「矯正医療」は原則として一般社会における医療と変わるところはない、とされるが、一体どこまでやるべきかは、国民感情とのかねあひもあると考えられている。最近とみに、犯罪者に対しては、被害者感情を重視して、厳しい視線が向けられ始めている世間の流れがある。高度先端医療、心臓外科、脳外科、インターフェロン療法、歯科治療などの程度まで治療するのか、外部医療機関との連携を含めてむずかしい点がある。

受刑者のうち、約11パーセントにあたる6,212名が精神障害を有する者である。そのうち医療専門施設で治療すべき者は422名である。昨年(2002)の法律改正(心神喪失者等医療観察法)により、あらたに予防拘禁される精神障害者は今後増えると思われる。

また医療刑務所では精神疾患の患者に作業療法を実施している。八王子医療刑務所では農業(花、観葉植物の栽培)、加工工場(買物用紙袋製造)、職業訓練工場(陶芸・陶器)などを行っている。北九州医療刑務所でも同種の工場が運営されている。

(2) アメリカの医療刑務所

アメリカ各州では医療刑務所の外部業務委託化が進んでいる。南カロライナ州で見ると、2003年の時点で、3つの民間医療機関が刑務所と医療解約を結んでいる。しかし、州当局の調査の結果必ずしも費用効率化がすすんでいるというわけでもなさそうで、報告書では、架空職員、無認可(無効)薬品などのおかげで年間83万ドルの無駄が出ているという。それで、新たにその名前も「プリズン・ヘルス・サービス」という会社と契約をし直した。しかし、報告書は、南カロライナ州の刑務所

INHCC, Institute of Nonprofit Health Care Cooperation

の公的医療は民営化された医療よりも安上がりだという。年間人当たり 1000 ドル (1 万 1000 円くらい) で他の 6 つの南部諸州の 3 分の 1 だという (すなわち、6 州の平均は 3000 ドルで約 35000 円で日本と同じか)。南カロライナ州の刑務所公的医療の長所は、医療スタッフが安定していることであるという。これは州立の医療施設であり、安定的な雇用が保障されているし、薬ももうけ主義的でなく効率的に使うからだという。刑務所医療は公的責任でおこなうべきなのは、受刑者の医療と安全とひいては社会の安全を確保することである、と報告書は述べている。民間医療機関は、契約の際にはコスト削減を約束しながら、いざとなると費用増加を画策する例があると報告されている。民間医療機関はまた糖尿病や肝炎の治療を断ったりするそうである。所管当局の報告書のせいであろうが、一般に、民営化をするとより効率的になり、EBA方式によりコストも安上がりになるというイデオロギイ的思いこみがあるのは困ったことであると指摘している。

アメリカの諸州の刑務所では劣悪な医療の事例も報告されている。そもそも医療施設が劣悪で、また非倫理的な治療なども行われているという看護婦からの告発も報告されている。精神医療の分野でも「ひどい非文明的な」治療が散見されるという。

アメリカ刑務所医療施設費用比較(2002)

種類	患者数	総費用、 ドル	治療対象外	一人あたり 費用
公立医療機関(アイダホ)	6297	11,800,000	一人年間 25000ドル 以上	1,873
民間矯正医療機関 (デラウェア)	6800	17,000,000	なし	2,617
メディケア・メディケイト 医療機関(CMS)(ワイ ミング)	1070	46,869,000	総額規制	6,419
州立医療機関(ノース ダコタ)	1032	57,500,000	なし	7,267
州立医療機関(ユタ)	5700	18,288,233	なし	3,208
民間医療機関(ユタ)	5700	17,088,233	予算調整	2,997

参考資料/www.grassrootsleadershop.org

(いしづか ひでお)